

教育相談の在り方を探る

—あらゆる教育活動の実践の中で生かす教育相談のために—

カウンセラー研究員 吉岡 潤 (川崎市立宮前平中学校)

I 主題設定の理由

平成 27 年度の川崎市立小・中学校における児童生徒の問題行動等の状況調査結果¹において、「不登校の要因」における「不安」の割合は中学生では 33.7%で最も多く、本校においても 27 年度は 28.1%、28 年度は 54.8%と大幅に増加している。実際に人間関係のトラブルや不登校の事案で、生徒が「不安」に自分で対処できず、「不安」をより増大させる悪循環に陥り、主な原因がわからぬまま深刻な事案へ発展することもある。そのため、生徒指導担当の立場から、教員が生徒の「不安」に気づき、寄り添うことが大切であり、そのためには学校全体で教育相談の在り方を見直すことが必要だと感じていた。

そのような中、本校では平成 29 年度教育計画における教育活動重点項目の中に『生徒理解に基づく組織的教育相談活動（予防的教育活動）』を位置づけて、生徒の気持ちに寄り添い、学校全体で行う教育相談活動に力を注ぐこととなった。

しかし、多くの学校でもそうであるように、本校でも経験の浅い若手教員が多いのに対して、日頃の教育活動の相談相手であり手本でもある中堅教員が少ない状態で、教員の年齢構成に大きな偏りが見られる。教育相談について理解を深め、日頃の教育活動を充実させるためには、意図的に校内研修会などの機会をつくる必要があるのではないかと感じた。

『生徒指導提要』²では、教育相談について「1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かし、教育相談的な配慮をすることが大切である」としている。教育相談について理解を深め、その視点を大切に日頃から生徒とかかわり、支援することは、生徒指導のみならず教科指導や学級指導をはじめ、あらゆる教育活動で教員が身につけるべき、基本的で重要な姿勢だと考える。

そこで本研究では、教育相談活動を生徒・保護者・教員とかかわりをもつあらゆる教育活動ととらえ、生徒や教員の教育相談に対する意識について調査・分析を行い、現状の教育相談活動について振り返る。そして、教育相談の在り方について理解を深め、見直すための職員研修会を計画・実施し、全教員が研修を通して学ぶ機会をつくることとした。その中で教員同士があらゆる教育活動で教育相談の視点を持って生徒とかかわり、寄り添うという思いを共有し、実践につなげることができれば、生徒が抱える不安を少しでも和らげる一助となり、本校の教育活動重点項目に掲げる『生徒理解に基づく組織的教育相談活動（予防的教育活動）』の実現につながると考えて主題を設定した。

II 研究の内容

1 アンケートの実施 “生徒の不安・安心を理解し、現状の教育相談週間を振り返る”

本校では、5月、12月に教育相談週間を設定し、事前にアンケートを取り、生徒全員を対象として1対1で一人15分程度の担任による教育相談を行っている。

今年度は1回目の教育相談週間を実施した後、生徒向けに「教育相談事後アンケート」、担任向けに「教育相談を終えて」という2つのアンケートを行った。この2つのアンケートの分析から現在の生

¹川崎市教育委員会事務局 2016年 10月

²文部科学省 2010年 3月

徒、教員の教育相談に関する状況を分析し、あらゆる教育活動の実践に生かす教育相談の在り方を探るためには、どのような職員研修を計画すればよいかについて考えるきっかけとした。

(1) 6月 生徒アンケート「教育相談事後アンケート」(1010人回答)

学校生活、友人・先生・家族に対する不安や安心についての設問で記述式アンケートを行った。また、教育相談週間を通して自分が抱える不安がどのようになったかを5択で答える質問も設けた。

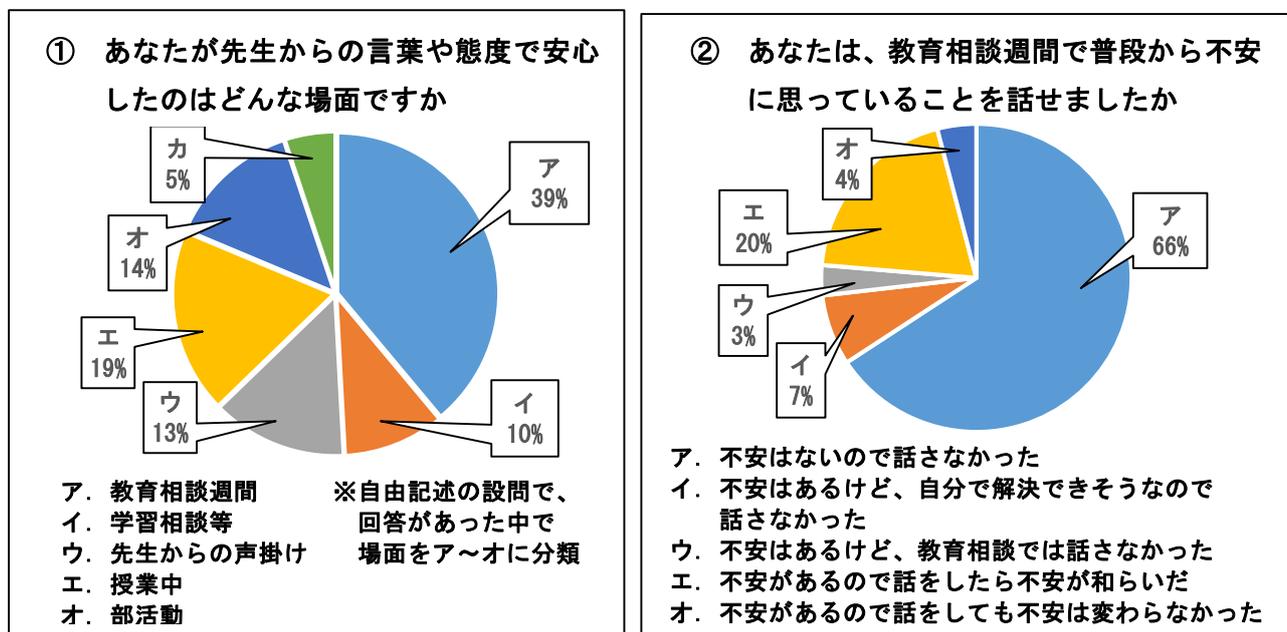


図1 先生からの言動で安心できる場面

図2 教育相談週間と生徒の不安

【考察】

図1では、回答の中で、「ア. 教育相談週間」が約4割を占め、「イ. 学習相談等」を合わせて約半数となっている。図2では、回答の中で、「エ. 不安があるので話をしたら不安が和らいだ」が20%で、これは「不安はある」生徒のうちの約6割となっている。教育相談週間や他の相談場面の設定は、生徒が安心できる一定の効果があるとわかった。

一方で、全体の3分の2が「不安はない」と回答したことにも注目した。これらの生徒にも、今後不安が生じる可能性はある。日常の学校生活で起こる心の変化に気づき、気持ちに寄り添う教育相談活動を行っていきたいと考えた。

(2) 6月 担任アンケート「教育相談を終えて」

教育相談週間で効果があったこと、生徒と話をする中で困ったこと・迷ったこと、クラスに対する不安、生徒との関係に対する不安について記述式アンケートを行い、その回答から課題をあげた。

① 教育相談週間の効果

「今まで十分に話せなかった生徒と話ができた」という回答が多数あった。

5月下旬まで担任と会話がない生徒がいることは、課題ととらえたい。担任には普段の観察や声かけの積み重ねなど工夫し、自分から話さない生徒だからこそ関係づくりを大切にすることを伝えたい。

② 教育相談週間の生徒との話の中で困ったこと、迷ったこと

教育相談の手法やスキルに関する不安が多くあがった。

5月に希望する教員を対象に生徒指導担当が教育相談研修を行ったが、教育相談の実際の場面について学ぶ機会も少なく、手探りで自分なりの方法を見出している状況であることがわかり、ロールプレイなど、実際の場面を見せ合いながら互いを高めていく取組の必要性を感じた。

③ 現在のクラスの様子で不安なこと

「自分の教科指導や学級の時間以外は、学級の様子が見えにくい。」との声が多くあがった。生徒は担任には見えないところで、いつもとは違う表情を見せることもある。各教科担当や副担任など、複数の目で多面的に見守るために、教員がチームとしての意識を高めることの重要性が見えてきた。

(3) 分析から見えてきたこと

2つのアンケート回答の分析から得た課題をもとに、次の3点を効果的な研修にするための方策として職員研修会を計画し、教育相談の在り方を探っていくこととした。

- ・教育相談を単に定期的面談と捉えず、日頃から生徒とのかかわりを大切にされた相談活動とする
- ・スキル向上だけでなく、教育相談に対する思いを共有し、チームとして取り組む体制を強化する
- ・議論だけにとどまらない具体的な取り組みを大切に、体験を通じた実践的な研修を行う

2 職員研修会の実施 “思いの共有から実践へ”

最初の研修会では教育相談についての自由な意見交換を進め、その成果や課題が次回へつながるように工夫した。毎回、研修会の感想をまとめて全員に配付し、内容を共有してから次の研修を行った。

さらに、総括教諭等にファシリテーターを依頼し、小グループでの話し合いの方向性を統一するため、また若手教員からも意見を引き出せるようにするために、研修の進め方について事前打ち合わせを行った。

(1) 9/11 第1回職員研修会

① 研修の実践

【テーマ】 日頃の取り組みと思いの共有

【形式】 学年、年齢をランダムに分けた6グループ 

【内容】 ・教育相談に関する意見交換（自分の考えやイメージを付箋に書き、模造紙に貼る）

・内容を絞り意見交換し、意見の関連を模造紙に書き込む

・今後の教育相談活動で実行することを各自が「ひと言宣言」としてグループ内で発表

② 研修の成果（研修後のアンケートより）

《日頃からの教育相談の大切さ》

- ・教育相談週間の意義は大きい
- ・日々の積み重ねこそが教育相談
- ・信頼関係、雰囲気や環境づくり、聴く姿勢が大切

《教育相談活動についての思いの共有》

- ・今回の研修は「先生の教育相談」
- ・年齢や経験を問わず、意見交換で互いに得ることが多い
- ・「共有、共感、共通理解」といった成果を感じとれた

《ひと言宣言》

- ・日頃からのかかわりや観察、日常的な会話、いつでもどこでも教育相談
- ・信頼関係、人間関係、安心感、距離感
- ・聴く姿勢、生徒の特性に合わせた対応
- ・相談しやすい雰囲気や環境づくり

初回はあえて細かいテーマを提示せず、自由な意見交換で進めたところ、話し合い活動が手法やスキルについての議論にとどまらず教育相談に対する思いの共感・共有にまで発展することができた。また、期間を設定した教育相談週間の意義の大きさを確認することで、日頃からのかかわりが、より大切であると焦点化できた。そのことによって、参加者が「ひと言宣言」を具体的にイメージできた。

③ 次回研修会へ向けて

「ひと言宣言」の内容が、その後どれくらい実践できるかが今後の課題であるため、第2回職員研修会では、「ひと言宣言」の内容が似ているグループに分けることで、実践結果やその効果を振り返り、議論にとどまらず、実践することの大切さを確認する場とすることとした。

(2) 10/6 第2回職員研修会

① 研修の実践

【テーマ】 振り返りと具体化

【形式】 「ひと言宣言」の内容別6グループ

【内容】 ・「ひと言宣言」の実践報告と結果・効果の検証

・生徒の姿、本校の生徒の実情を踏まえた具体的な教育相談活動の検討、提案



図4 振り返りの様子

② 研修の成果（研修後のアンケートより）

《ひと言宣言の実践と効果》

- ・『他愛のない話からの“話せる関係づくり”』
→以前より生徒との距離感が近づいた
- ・『気軽な雰囲気自分から話しかける』
→気づかなかったことに気づくようになった
- ・『全体でほめる、個別でほめる、の使い分け』
→ほめる場面が増えた

《ひと言宣言の実践から見えた課題》

- ・「聴く」ことの難しさ 教師が変わると生徒が変わる
- ・分け隔てない生徒への声のかけ方、かかわり方
- ・生徒の背景、家庭、特性に応じたかかわり方
- ・個に応じた対応と、対応が違うことによる生徒の戸惑いへの対処

《本校の生徒の実情 → 具体的な教育相談活動》

- ・自分からの発信が苦手 → チームで生徒理解を進め、安心感を高める
- ・自己に対する評価が低い → 役割を与え普段から褒める、認める
- ・学力が高く学習に関心がある → 教科指導・授業の工夫で関係を築くきっかけをつくる
- ・相談する＝指導(怒られる) → 相談する＝傾聴(受け入れられる)と感じられるよう生徒一人一人を尊重する

「ひと言宣言」の実践に個々に取り組んでいた教員が大変多く、短期間で効果が得られた報告や、壁にぶつかることでの課題の発見など、実践を伴うことで議論だけでは得られない深め方ができた。

また、本校の実情に合わせた、より具体的な提案まで発展させることができた。

③ 次回研修会へ向けて

実践を通して深められたことを活用し見出された課題を改善するため、第3回職員研修会では、場面を設定した体験的な内容を取り入れることとした。そして、教員としてだけでなく、生徒や保護者などの立場を体験し、立場によるとらえかたの違い等、気持ちに寄り添って考えることも大切にしたい研修とすることにした。



図5 3人1組のロールプレイ

(3) 11/9 第3回職員研修会

① 研修の実践

【テーマ】 事例体験とさまざまな視点での事例のとらえ方

【形式】 ロールプレイ×事例3本 ファシリテーター：生徒指導担当、特別支援コーディネーター

【内容】 ・ロールプレイ：相談者役、教師役、観察者（1対1：7分）、シェアリング（8分）

・メンター、ファシリテーターの振り返り（各会場）

② 研修の成果（研修後のアンケートより）

《いろいろな役割を演じて》

- ・他の先生方の「聴き方」を生で見参考になった
- ・役割交代によって様々な視点から考えられた
- ・観察者の立場で見ることでの気づきや発見があった
- ・客観的に見ること自分の対応を見直すことができた

《相談者の気持ちに寄り添って》

- ・気持ちに寄り添うことが一番の収穫だった
- ・「聴き上手」が相談しやすさにつながるとわかった
- ・相談者役の体験で相談しやすい声かけ方法に気づいた
- ・気持ちがうまく伝わらないことの苦しさがあった

《聴く立場として大切なこと》

- ・言葉だけでなく、一つひとつの仕草や表情からも受け止めることの大切さ
- ・話をすべて聴き終える前に、解決を急ごうとする教師は信頼されない
- ・教育相談アンケートの活用で、相談の全容が見えた アンケートの有効活用
- ・相手の気持ちを考えることが基本 「決めつけない、押し付けない、次につなげる」

当初から事例検討やロールプレイを取り入れた研修への要望も多く、熱心な取り組みが見られた。立場を変える、客観的に見るなど、実際の場面ではできない体験からの気づきが大きな成果となった。また、「相談者の役割を演じて、初めてその気持ちに寄り添うことができた。」という声も多かった。

③ 研修を終えて

2回目までの研修会で成果として得られたことが、ロールプレイを通して議論にとどまらず、実際の体験と結びつく研修にすることができた。特に相談者の気持ちに寄り添う体験ができたことは、個々の教員にとって今後の教育相談活動に生かせる財産になったと感じた。

ロールプレイ後のシェアリングは、実際の体験を介していることで、今までの研修会での意見交換より共有や受容がより深まっていた。今後は、シェアリングで展開されたような教員間の関係性を生かして、チームとしての教育相談体制構築につなげていきたい。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から得たもの

(1) 職員研修会を通じて教員が得たもの

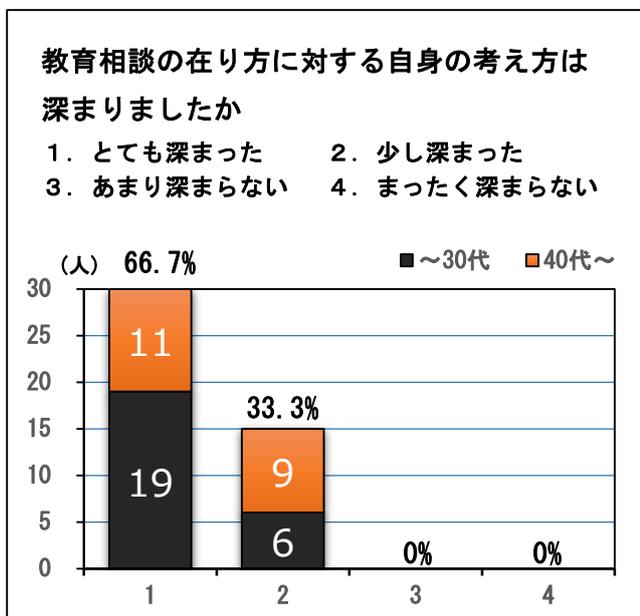


図6 教育相談の在り方に対する考えの深まり

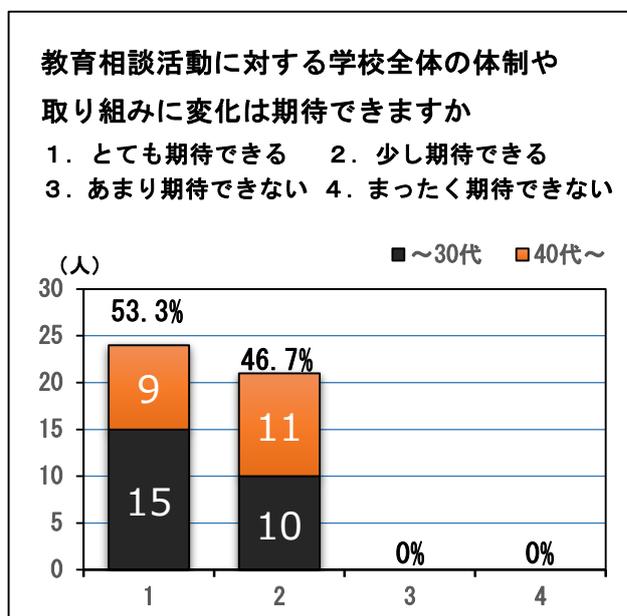


図7 今後の教育相談活動や体制の変化への期待

3回の職員研修会の終了後に、教員アンケートを実施した結果、45人から回答が得られた。

2つの設問に対してすべて肯定的な回答が得られた。教育相談に対する自身の考えの深まりや学校全体の取り組みへの期待の高まりについて、教員全体の意識に今後を生かせる前向きな変容があったとみることができる。特に若手教員にそれが強く表れており、研修会が経験の浅い教員にとって有意義な内容であったと考えられる。

また、感想からも「深まった」、「期待できる」ととらえられる具体的な記述があった。

① 深まった内容

- ・キーワード「聴く」の重要性の認識、実践への工夫を学べた。今後を生かしていきたい。
- ・普段からの生徒とのかかわりが大切だと改めて感じた。「毎日が教育相談」の意識で過ごしたい。

② 期待できること

- ・学校全体がチームとなって1つの方向を向き、生徒を教育することが大切だと思えた研修だった。
- ・いろいろな考えや取り組みを共有できた。学校全体で取り組めたことで今後を生かされると思う。

(2) 教育相談の在り方に対する共通理解

研究を始める前は校内で漠然ととらえられていた「教育相談の在り方」だが、全教員でアンケートの分析や3回の職員研修会、感想のまとめを共有することを通して、学校全体で共有することができた。さらに、その具体的な内容を実践し確かめ合うことで「教育相談の在り方」についてのより深い共通理解が進みつつある。

そして、「教育相談の在り方」に対する共通理解が進んでいることが、学校全体での一体感を確認することにもなり、教員集団の結束にもつながっている。

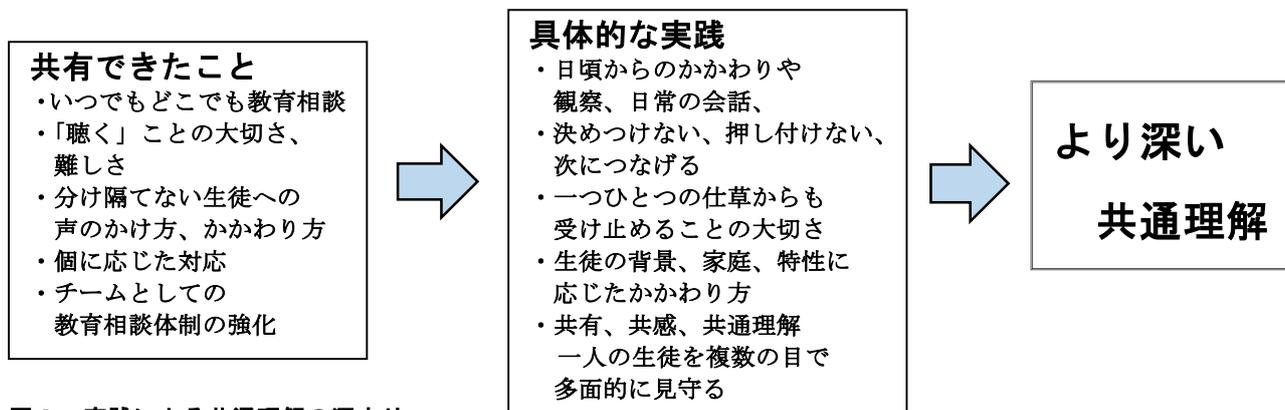


図8 実践による共通理解の深まり

(3) 学年チームとしての教育相談

これまでの研究を通して、チームとしての教育相談活動は、情報交換を密にし、生徒を多面的に見守ることが基本になると学校全体で確認できた。

それを受けて、12月の学年会で、1、2学年が確認した内容はそれぞれ次のようになっている。

① 1学年

共有 ・普段の何気ない職員室での会話や授業で気づいたこと、部活動や委員会活動で感じたことなどを職員間の会話に取り上げることで生徒を観察する共通の土台とする。

・「教育相談」は特設期間だけではなく、日々の実践でかかわり合うことを大切にする。

実践 ・特別な支援が必要な生徒に対して行っている個々の具体的な支援方法について、学年の情報交換の中で毎回報告している。

また、必要な支援の在り方について意見を出し合っている。

効果 ・LINEに関する女子の生徒指導で、担任だけではなく、部活動顧問、授業担当者あるいは学年の教員が同時に関係生徒と個別対応し、情報を共有化できた。以前から行っている対応だが、職員研修の効果もあり、事案の背景を共通理解し、個々の特性に応じたチームとしての指導体制がよりスムーズに機能した。

② 2学年

共有 ・日々の生活の中で常に細やかなレポートをとる体制を維持する。

・生徒が「愛されている」と感じるような関係づくりを目指す。

実践 ・気になる生徒への細やかな声かけをするために、授業巡回中にどのクラスでも入り込み、授業観察を通して生徒とのレポートをとるきっかけをつくっている。

・教員間の横のつながりを密にし、多くの目で生徒を多面的に見守っている。

効果 ・生徒とのかかわりや雰囲気は良くなりつつある。教育相談の視点を日頃から意識して取り組むことによって生徒からの会話の機会が増えるなど、徐々に成果が出ている。

(4) 学校全体としての教育相談活動

本校では現在、学年ごとに「職員巡回簿」を使った授業巡回を行っている。これまでの研究の成果として既存の活動に教育相談の視点を取り入れる体制が整いつつあるため、学校全体で授業巡回の内容を見直すことを提案し、12月から実施している。

今まで本校の授業巡回は、休み時間や授業の様子を担当に伝えることによるトラブルの早期発見が重点となっていた。見直しの内容は、教育相談の視点で生徒の様子や学校環境を観察し、情報を共有することで、授業巡回における生徒理解をトラブルの未然防止に活用していくというものである。

授業変更などの校内事情で巡回当番がはっきりしないことが多いにもかかわらず、授業終了後から次の授業開始後にかけて以前よりも多くの教員が生徒を見守り、生徒から話しかけてくることも増えているとの報告もある。巡回当番だけでなく多くの目で生徒を見守る意識が少しずつ浸透している。

(5) 生徒の変容

10月、12月に1，2年生の生徒全員を対象にアンケートを実施した。(各728人回答)

5つの選択肢、①とても思う、②少し思う、③あまり思わない、④まったく思わない、⑤よくわからない、の①、②を肯定、③、④を否定、⑤を他として回答結果をまとめた。

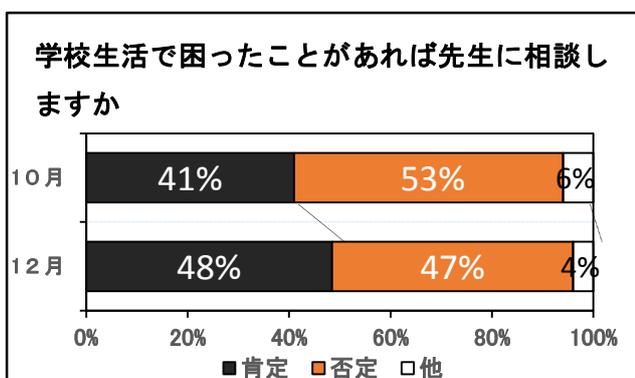


図9 「困った時に先生に相談する」割合の推移

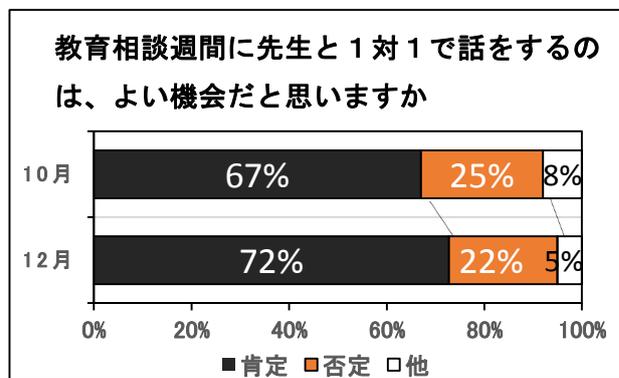


図10 「教育相談週間で先生と話すこと」の捉え方の推移

上の2つの設問に関しては、回答の割合にある程度の変容が見られた。「先生に相談する」、「1対1で話をするのはよい機会だ」という2点で肯定とする割合が上がったということは、本研究で教育相談活動に全教員が共通理解を持って取り組んでいることによって、生徒との関係が築かれつつあると考えられる。職員研修会の感想や学年会での確認などからも、教員と生徒との距離が近づいている様子や、日頃からの教育相談活動の成果が現れているという声が上がっている。

生徒が不安を教員に話せる関係が研究の成果として現れ始めているので、今後は生徒からの相談機会の増加につながっていくことを期待したい。

(6) 研究を通して

本研究に携わるにあたっては、教員同士が教育相談に対する思いを共有し、あらゆる教育活動で教育相談の視点を持って生徒とかかわり、気持ちに寄り添うことができれば、生徒の不安を和らげ安心した生活を送る一助になると考えて、生徒指導担当の立場からアンケートの分析や職員研修会の計画・実施に取り組んできた。

その結果、教員の教育相談の在り方に対する共通理解や、教員と生徒の関係の深まりに一定の効果がみられ、教員が教育相談の視点でチームとして生徒を支え、寄り添える存在となる基礎が築けた。

以前は教育相談の在り方について自分の中でも漠然としていたが、本研究を通して、不登校やいじめを含めた諸問題が起こったときの「問題解決的・治療的」な教育相談だけでなく、諸問題が起こる

前の「未然に防ぐ・予防的」な教育相談を推進していきたいと変わってきている。また、教育相談で日々繰り返される生徒との関係づくり、観察、会話などから得られる生徒の変化に対する「気づき」が未然予防の重要な要素になると改めて考える機会になった。

2 今後の課題

12月に生徒を対象に実施したアンケートの「学校生活で困ったことがあれば先生に相談するか」という設問に対する回答では、ある程度の変容が見られたとはいえ、肯定が否定をわずかに上回る状態である。否定の回答の理由は、様々なことが推測できるが、今後はその理由にも迫っていきたい。そして本研究で取り組んだ具体的な実践を継続していき、生徒との関係をさらに深めつつ「先生と話したい」と思う生徒を少しずつ増やしていきたい。

また、私は日頃から自分の力で不安から抜け出し自立できる生徒を育てたいという思いを抱いていた。そのためには、今後さらに生徒の力も育てる必要性を感じる。例えば本校ですでに導入しているストレスマネジメントや共生*共育プログラムによる生徒間のネットワーク強化で相談できる友人を増やすなど、自己解決スキルの育成に努めたい。そして、そのスキルを活用するためには、生徒が自己肯定感を高め自信を持って生活することができるように互いを認め合う活動を取り入れていきたい。

その上で、全教員で共有したチームで取り組む教育相談活動の大切さを、「未然予防」の積極的な意識で活用し、現状の校内体制を生徒理解に基づく組織的な予防的教育活動へと見直していきたい。そして一人の担任を中心に、教科担当や副担任が周りを支えるチーム構造をいくつも重なり合わせることで、相互作用や相乗効果が働き、学校全体の力を向上させることにもつなげていきたい。

さらに、中堅・ベテラン教員に依頼したファシリテーター機能を日頃から定着させたり、様々な校内研修を行ったりするなど、年齢や経験にかかわらず全教員が高め合う体制を築いていけば、学校全体の向上につながるはずである。

最後に、このような研究の機会を与えていただいたことを感謝申し上げます。また、本研究に際しましては、ご指導ご鞭撻をいただきました川崎市総合教育センターの皆様、ご協力をいただきました、勤務校の山本浩之校長先生をはじめ職員の皆様にご心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 渡辺弥生 丹羽洋子 篠田晴男 堀内ゆかり 『学校だからできる生徒指導・教育相談』
北樹出版 2000年
- 岡田守弘 監修 芳川玲子 安藤嘉奈子 中島香澄 編著 『教師のための学校教育相談学』
ナカニシヤ出版 2008年
- 『生徒指導提要』 文部科学省 2010年
- 『OJT実践ガイドブック』 東京都教職員研修センター 2010年
- 黒田祐二 編著 『実践につながる教育相談』 北樹出版 2014年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事

板橋美由紀

小清水 豊